

山形県における啓翁桜産地の生産流通構造——JAさがえ西村山とJA庄内みどりの例——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 酒井, 宣昭, 浜西, 駿輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/25085

山形県における啓翁桜産地の生産流通構造

——JA さがえ西村山とJA 庄内みどりの例——

酒井 宣昭・浜西 駿輔

I. はじめに

啓翁桜（ケイオウザクラ）は、各産地で切り枝花木として商品用に栽培を行っている品種である。この啓翁桜は秋から冬にかけて休眠している状態の桜の枝を切り、その切り枝を促成室に入れて加温し、開花時期を早めて12月中旬～3月下旬に出荷する（酒井・浜西2019）。啓翁桜は春になるとソメイヨシノ、シダレザクラ、ヤマザクラなどの品種と同じく自然に開花する。ただし、商品用に栽培を行っている啓翁桜の産地では、自然に開花した状態の啓翁桜を切り枝花木として出荷しない。

2017年5月14日～2018年8月7日にかけて行った山形県東根市の啓翁桜の各生産者への聞き取り調査によると、高崎地区関山を通る国道48号沿線の啓翁桜の樹園地では、啓翁桜が4月に開花すると路地や空き地に車やバイクを駐停車して鑑賞する人や写真を撮影する人が多いことを伺った。写真1は2021年4月18日（日）に高崎地区関山にある促成室の「JA さくらんぼひがしねさくらセンター」（標高241m）付近の樹園地で開花した啓翁桜を撮影したものである。この時点では、樹園地の約300m以内にある数本のソメイヨシノはどれも満開であったが、啓翁桜は散り始めている木や葉桜になっている木も多くみられた。

この他、各地には観賞用に植樹している啓翁桜があることも確認できた。まず、環境省が管理する東京都新宿区内藤町の新宿御苑（しんじゅくぎょえん）には、サービスセンター（管理事務所）前に啓翁桜が2本植樹されており、春になると薄いピンク色の花が咲く。この開花した啓翁桜を鑑賞したり写真撮影したりしてい



写真1 東根市関山地区にある樹園地で開花した啓翁桜 21.4.18撮影

る様子は、多くの人がYouTube、blog、Twitterなどに投稿している。

また、2021年2月26日（金）のNBC長崎放送によると、長崎市鳴滝にある七面山妙光寺（しちめんさんみょうこうじ）の境内には啓翁桜があり、2021年は例年より約2週間早く開花したとの報道があった。七面山妙光寺の啓翁桜は2週間ほど見頃が続き、地元では啓翁桜の花見の名所の1つになっており、開花時期には啓翁桜を鑑賞しながら弁当を食べたりする光景も見られるという。

本研究の目的は、啓翁桜の一大産地である山形県を例に取り上げて啓翁桜産地の生産流通構

造について明らかにすることである。山形県内のJAの中で生産者数が2戸以上であるのは、各JAや各生産者への聞き取り調査によると、①JAやまがた（管轄地域：山形市、上市市、中山町、山辺町）、②JAさくらんぼひがしね（管轄地域：東根市）、③JA山形おきたま（管轄地域：米沢市、南陽市、長井市、高畠町、川西町、白鷹町、飯豊町、小国町）、④JAてんどう（管轄地域：天童市）、⑤JAさがえ西村山（管轄地域：寒河江市、大江町、朝日町、西川町、河北町）、⑥JA庄内みどり（管轄地域：酒田市袖浦以外、遊佐町）、⑦JAみちのく村山（管轄地域：村山市、尾花沢市、大石田町）である^{▼1}。このJAの中で、酒井・浜西（2019）はJAやまがたとJAさくらんぼひがしねにおける啓翁桜産地の生産流通構造について明らかにした。また、酒井・浜西（2020）ではJA山形おきたまとJAてんどうにおける啓翁桜産地の生産流通構造について明らかにした。本稿は酒井・浜西（2019、2020）に続き、JAさがえ西村山とJA庄内みどりにおける啓翁桜産地の生産流通構造について明らかにする。

なお、酒井・浜西（2019）では、I章で桜の品種、啓翁桜の誕生と命名、啓翁桜に関する研究、啓翁桜産地の分布について整理した。また、II章では山形県における啓翁桜の栽培カレンダー、生産者数、作付面積、出荷量、出荷額などの推移についても整理した。酒井・浜西（2019）のI章とII章の内容は、本稿では重複を避けるため省略する。

本稿の構成は、I章では啓翁桜の概要と本研究の目的について明らかにする。II章ではJAさがえ西村山における啓翁桜産地の生産流通構造を明らかにし、III章ではJA庄内みどりにおける啓翁桜産地の生産流通構造を明らかにする。II章とIII章では、1. 栽培の始まり、2. 生産者数の推移、3. 樹園地と作付面積、4. 集出荷を行う作業室を併設した促成室の整備状況、5. JAからの出荷先と出荷量の調整、6. 栽培技術の支援、7. 組合の結成と活動状況、8. 生産者の状況、9. 産地の抱える問題点、の順に整理する。前述1節～7節は文献や資料、各

JAへの聞き取り調査により検討し、前述8節と9節は各生産者への聞き取り調査のデータにより検討する。IV章では本稿の要点と今後の研究課題について述べる。

JAさがえ西村山の管轄地域における各生産者への聞き取り調査は、2017年11月30日～2019年2月18日にかけて行った。2018年度の実産者数は29戸であるが、聞き取り調査ができたのは全体の48.3%にあたる14戸であった。なお、調査期間は約1年3か月と長いため、生産者の年齢は2019年2月18日時点で修正を行った。

JA庄内みどりの管轄地域における各生産者への聞き取り調査は、2018年8月9日～2019年2月14日にかけて行った。2018年度の実産者数は22戸であるが、聞き取り調査ができたのは全体の45.5%にあたる10戸であった。なお、調査期間は約7か月とやや長いため、生産者の年齢は2019年2月14日時点で修正を行った。

生産者数は、酒井・浜西（2019、2020）と同じく各JAへの聞き取り調査で明らかにしたが、生産者名やその所在地および連絡先はインターネットでの検索や生産者からの紹介、住宅地図を利用して明らかにした。また、各生産者への聞き取り調査では生産者の生年月日と性別と続柄、栽培開始年、啓翁桜以外に栽培している農作物など、樹園地、作付面積、例年の平均出荷量、出荷先、生産者からみた当産地の抱える問題点について行った。

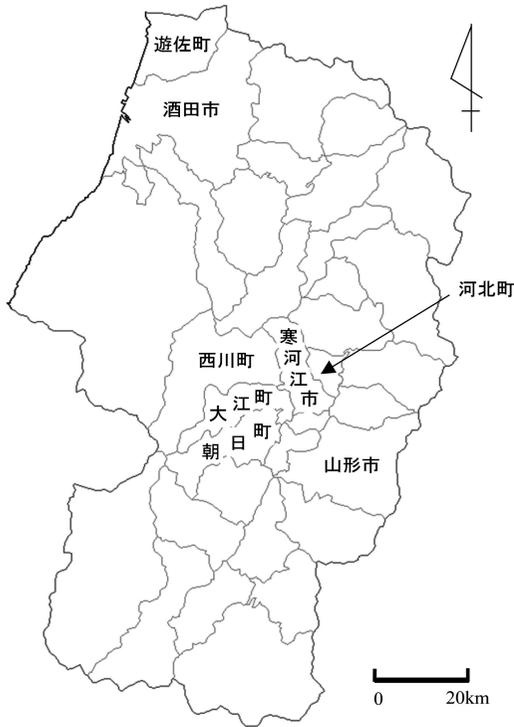
II. 啓翁桜産地の生産流通構造

——JAさがえ西村山——

1. 栽培の始まり

JAさがえ西村山の管轄地域は、寒河江市、大江町、朝日町、西川町、河北町の1市4町である（第1図）。このうち、啓翁桜の栽培は寒河江市、大江町、朝日町、西川町で行われている。いずれの市や町では、生産者がそれぞれに栽培を始めたため、先駆者などによる栽培の呼びかけはみられない。

2018年度の実産者数は29戸であるが、啓翁桜の栽培を始めるにあたり多くの生産者が理解し



第1図 JAさがえ西村山とJA庄内みどりの管轄地域

山形市は2つのJAの管轄地域ではないが、他の市町との位置関係を把握しやすくするために記載した。JA庄内みどりの管轄地域は酒田市袖浦以外と遊佐町である。酒田市袖浦はJAそでうらである。

ていたことは、各生産者への聞き取り調査によると、①収入が安定して得られる農作物であること、②山形県内で栽培が始まった花木であること、③転作田や傾斜地、耕作放棄地などでも樹園地にできること、④山形県内各地の生産者や山形県の農業技術普及課により栽培技術が確立されていたこと、の4点である。

朝日町では、鈴木俊昭氏への聞き取り調査によると、啓翁桜の栽培は1988年にリンゴ、米、タバコの生産者である鈴木利道氏（当時34歳）が育苗などに使用するハウスの冬期の有効活用として始めた。1989年にはリンゴの生産者である鈴木俊昭氏（当時35歳）も育苗などに使用するハウスの冬期の有効活用として始めた。栽培を始める前には、鈴木利道氏、鈴木俊昭氏とも

に村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課の助言を受けた。

西川町では、吉見秀秋氏への聞き取り調査によると、米や野菜の生産者である佐藤義一氏が始めた。栽培を始める前には、村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課の助言を受けた。啓翁桜の栽培開始年、栽培を始める前の職業や農作物、栽培の動機については不明である。

2018年9月12日に行ったJAさがえ西村山への聞き取り調査によると、西川町が1996年に西川町吉川の尾畑山（おばたやま）の南向き斜面に「吉川営農団地」の圃場整備を行った^{▼2}。適用した事業名は不明である。吉川営農団地は、西川町が1972～1974年頃の「第二次農業構造改善事業」で造成した「吉川ぶどう団地」の跡地を啓翁桜の樹園地として利用したものである。尾畑山の標高は320.9mであるが、啓翁桜の樹園地は標高約280m付近にある。この他、河北新報の記事（2021.12.6）によると、西川町では2017～2021年度にも町内2か所に啓翁桜の生産団地を造成している。

吉川営農団地などの生産団地を造成する目的は、やまがたアグリネットの記事（2010.4.30、2010.11.1、2015.12.28）、河北新報の記事（2021.12.6）によると、これまで西川町の特産品がなかったため、今後は啓翁桜を町の特産品として産地化することであった。西川町産業振興課では出荷額1億円を目標として掲げている。

吉川営農団地における生産者の募集方法は、西川町啓翁桜生産組合やJAさがえ西村山などが生産者への声かけを行った。生産者数は6戸、総作付面積は約12haとなっている。栽培は1997年度より始まり、初出荷は2000年度であった。

大江町では、堀陽一氏への聞き取り調査によると、2000年に果樹やナスを主とする夏野菜の生産者である堀陽一氏（当時45歳）が冬期に収入が安定して得られる啓翁桜の栽培を始めた。栽培を始める前には、JAさがえ西村山の助言を受けた。

寒河江市での啓翁桜の栽培の始まりは、JAさがえ西村山や各生産者への聞き取り調査を

行ったが不明であった。

2. 生産者数の推移

生産者数は、2018年3月12日と2018年9月12日に行ったJA さがえ西村山への聞き取り調査によると、2013年度は30戸、2014年度は30戸、2015年度は31戸であった。続いて、2016年度は31戸、2017年度は29戸、2018年度は29戸となっている。なお、2012年度以前の生産者数はJA さがえ西村山で集計していないため不明である。

3. 樹園地と作付面積

西川町では、Ⅱ章1節に記述した尾畑山の吉川営農団地などで啓翁桜の栽培が行われている。また、朝日町では宮宿（みやじゅく）や和合（わごう）など、大江町では富沢（とみざわ）、三郷乙（さんごうおつ）、本郷（ほんごう）などにある樹園地で啓翁桜の栽培が行われている。このように、西川町の主要な樹園地は吉川営農団地などの生産団地にまともまっているが、朝日町と大江町の樹園地は点在している。寒河江市では聞き取り調査ができなかったため不明である。

樹園地は、朝日町では主に標高約200m～350mにある畑や耕作放棄地を、西川町では標高約280m付近にある吉川営農団地と標高約

140m～約200mにある畑や耕作放棄地などを利用している（写真2、写真3）。また、大江町では主に標高約120m～約150mにある畑、転作田、耕作放棄地、借地を利用している。寒河江市では聞き取り調査ができなかったため不明である。

作付面積は、2018年9月12日に行ったJA さがえ西村山への聞き取り調査によると、JA さがえ西村山で集計していないため不明である。なお、参考値としてやまがたアグリネットの記事（2010.11.1）によると、西川町における2009年度の作付面積は約13haである。また、河北新報の記事（2021.12.6）によると、西川町における2016年度の作付面積は約19.3ha、同じく2021年度の作付面積は約34.1haとなっている。

4. 集出荷を行う作業室を併設した促成室の整備状況

集出荷を行う作業室を併設した促成室の整備状況は、村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課が発行している資料（2016.11.30）、やまがたアグリネットの記事（2010.11.1、2016.12.28）、2017年11月23日に行った啓翁桜促成室での建設年や事業名などを記載したパネルの確認、2018年9月12日に行ったJA さがえ



写真2 西川町の尾畑山にある吉川営農団地
やまがたアグリネット（2010.4.30）による



写真3 朝日町にある樹園地
19.2.7撮影

西村山への聞き取り調査により明らかにする。

これらの資料によると、西川町では2000年に「山形県園芸銘柄産地育成事業」を活用して西川町吉川にあるJA さがえ西村山吉川ライスセンターの敷地内に95.985㎡の「啓翁桜促成室」を建設した^{▼3}。また、西川町では2006年に「山形県園芸産地拡大強化支援事業」を活用して96.28㎡を増設した。さらに、JA さがえ西村山では2014年に「山形県戦略的園芸産地拡大支援事業」を活用して増設した。これらの事業によって、啓翁桜促成室の面積は作業室189㎡（約57坪）と促成室660㎡（約200坪）と合わせて849㎡（約257坪）となった（写真4、写真5）。



写真4 西川町にある啓翁桜促成室
17. 11. 23撮影



写真5 西川町にある啓翁桜促成室の内部
17. 11. 30撮影

啓翁桜促成室の構造は床暖房を取り入れた軽量鉄骨ハウスである。

西川町にある啓翁桜促成室は、JA さがえ西村山の管轄地域の生産者であれば誰でも利用することができるが、寒河江市と朝日町の実産者は自ら促成室を所有しているため、この啓翁桜促成室は、現時点では西川町と大江町の生産者が利用している。個人で所有している促成室は、野菜などを生産するパイプハウスを利用している場合がほとんどである（写真6）。西川町に共同で利用できる促成室を建設した理由は、西川町がJA さがえ西村山の管轄地域の中で出荷量が約50%と一番多いためである。

西川町の啓翁桜促成室では、切り枝（粗枝）の調整と結束、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷の作業を12月下旬～4月上旬の毎日8：00～18：00頃まで行っている。ただし、出荷量が少ない年は期間が短縮になる。西川町と大江町の各生産者は、前述の作業期間と作業時間に自家用のトラックを使用して啓翁桜促成室に啓翁桜を適宜搬入する。促成室での促成管理は、JA さがえ西村山の担当者が行う。選別と箱詰めを含む出荷の作業は、西川町啓翁桜生産組合の組合員が行っている。出荷量が多い12月下旬は、西川町啓翁桜生産組合の組合員とJA さがえ西村山が雇用しているパートを合わせて約15人で行う。選別と箱詰めを含む出荷の作業後は、商品を啓翁桜促成



写真6 朝日町の生産者が所有する促成室
18. 12. 20撮影



写真7 JAさがえ西村山フラワーセンター
19. 2. 12撮影

室で作業している人が寒河江市高松にある集出荷場のJA さがえ西村山フラワーセンターへ搬入する(写真7)▼⁴。

一方、寒河江市と朝日町の各生産者は、自己管理の下、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷、集出荷場であるJA さがえ西村山フラワーセンターへの商品の搬入までの作業を行う。

JA さがえ西村山における選別の長さや等級は、長さが80cm、100cm、120cm、150cmの4つあり、等級はそれぞれの長さによって秀、優、良の3つがある。JA さがえ西村山フラワーセンターには、12月下旬～4月上旬の火、木、日曜日の8:00～10:00までに搬入する。集出荷場では、JA さがえ西村山の担当者が長さ、等級、出荷量を確認して出荷する。また、集出荷場から市場へ出荷する時はJA 全農山形ライフサポートの手配する運送業者が行う。

5. JAからの出荷先と出荷量の調整

出荷量は、2018年3月12日と2018年9月12日に行ったJA さがえ西村山への聞き取り調査によると、2013年度は約28万本、2014年度は約30万本、2015年度は約35万本であった。続いて、2016年度は約26万本、2017年度は約27万本、2018年度は約27万本となっている。なお、2012年度以前の出荷量はJA さがえ西村山で集計していないため不明である。

出荷額は、2018年3月12日と2018年9月12日に行ったJA さがえ西村山への聞き取り調査によると、2013年度は約3,561万円、2014年度は約3,866万円、2015年度は約4,260万円であった。続いて、2016年度は約3,566万円、2017年度は約3,747万円、2018年度は約3,746万円となっている。なお、2012年度以前の出荷額はJA さがえ西村山で集計していないため不明である。

例年の出荷先は、2018年9月12日に行ったJA さがえ西村山への聞き取り調査によると、①東京都中央卸売市場大田市場には約40%、②JA 全農山形ギフト市場には約30%、③仙台市中央卸売市場には約10%、④株式会社大阪鶴見フラワーセンター(大阪鶴見花き地方卸売市場)には約10%、⑤その他の市場(東京都中央卸売市場世田谷市場、東京フラワーポート株式会社、地方卸売市場株式会社埼玉園芸市場など)には合わせて約10%となっている。また、12月の出荷量は全出荷量の約50%を占める。

6. 栽培技術の支援

JA さがえ西村山における啓翁桜の栽培技術の支援は、2018年9月12日に行ったJA さがえ西村山への聞き取りとやまがたアグリネットの記事(2010. 4. 30、2011. 4. 25)によると、JA さがえ西村山花木部会と山形県村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課との共同で行っている。JA さがえ西村山花木部会は、結成年は不明であるが、生産者の共同事業と共同出荷体制を築くことを目的に結成された。JA さがえ西村山花木部会の2017年度と2018年度の会員数は60戸であるが、うち啓翁桜生産者はJA さがえ西村山の生産者数と同じ29戸である。

4月下旬には樹園地で株の整理方法や環状剥皮処理、病害虫防除、施肥などの注意点を確認するための啓翁桜栽培研修会を実施している。また、9月上旬には生育状況を確認するための樹園地巡回、10月下旬にはその年の出荷量を見積もるための樹園地巡回を実施している。

7. 組合の結成と活動状況

寒河江市と朝日町には組合はないが、西川町

と大江町の生産者からなる「西川町啓翁桜生産組合」は1995年に結成した（やまがたアグリネット2010.11.1）。西川町啓翁桜生産組合における2018年度の組合員数は、2018年9月12日に行ったJA さがえ西村山への聞き取り調査によると西川町6戸、大江町3戸の計9戸である。

西川町啓翁桜生産組合の主な活動は、Ⅱ章4節に記述した西川町啓翁桜促成室での切り枝（粗枝）の調整と結束、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷の作業である。

8. 生産者の状況

産地全体の生産者年齢構成（第1表）は、生産者合計は26（男20、女6）人で、その生産者は30歳代～70歳代までいるが、とくに60～69歳は12（男9、女3）人と多い。続いて、30～39歳は5（男3、女2）人、40～49歳は男4人、70～79歳は4（男3、女1）人、50～59歳は男1人となっている。

産地全体の生産者平均年齢は、表には示していないが55.8（男56.2、女54.7）歳である。JA さがえ西村山では、生産者の高齢化は進んでいるものの、30歳代～50歳代の生産者は合わせて10人がいるため、後継者は着実に育成されている。

第1表 産地全体の生産者年齢構成

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	3	1
60～69歳	9	3
50～59歳	1	0
40～49歳	4	0
30～39歳	3	2
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	20	6

単位：人
聞き取り調査により作成。

1戸ごとの生産者年齢構成（第2表）は、①生産者番号1、4、5、6、7は60～69歳に男1人、②生産者番号2は60～69歳と30～39歳に男女1人ずつ、③生産者番号3は70～79歳に男女1人ずつ、30～39歳に男1人となっている。続いて、④生産者番号8は60～69歳に男女1人ずつ、⑤生産者番号9は70～79歳に男1人、60～69歳に女1人、40～49歳に男1人、⑥生産者番号10は70～79歳と40～49歳に男1人ずつとなっている。さらに、⑦生産者番号11、14は40～49歳に男1人、⑧生産者番号12は60～69歳に男2人、50～59歳に男1人、⑨生産者番号13は30～39歳に男女1人ずつとなっている。このように、1戸あたりの生産者数は1～4人であり、うち1人は7戸、2人は3戸、3人は3戸、4人は1戸となっている。2～4人の場合は夫婦や親子が6戸、農事組合法人による従業員の雇用が1戸である。また、後継者がいる、もしくは親がリタイアし、子のみで栽培を行っているのは生産者番号2、3、9、10、11、13、14の7戸である。

栽培開始年（第3表）は、1988年以降、0戸の年もあるが、2015年は2戸、1988年、1989年、1996年、1997年、2000年、2001年、2002年、2004年、2009年、2010年、2016年、2019年は1戸ずつであった。朝日町では1988年、大江町では2000年に啓翁桜の栽培が始まったが、その生産者は現在も栽培を行っている。一方、西川町では佐藤義一氏が啓翁桜の栽培を始めたが、現在は栽培していないため、栽培開始年や経緯などについては聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。また、西川町で佐藤義一氏の次に古い生産者については聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。さらに、寒河江市で啓翁桜の栽培を最初に始めた人やその時期、経緯などについては、各生産者への聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。

栽培作物の組み合わせ型（第4表）は、①啓翁桜+果樹と②啓翁桜+米+果樹は3戸ずつ、③啓翁桜+花きは2戸、④啓翁桜+特用林産物（シイタケ）、⑤啓翁桜+米+花き、⑥啓翁桜

第2表 1戸ごとの生産者年齢構成

生産者番号1、4、5、
6、7

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	0	0
60～69歳	1	0
50～59歳	0	0
40～49歳	0	0
30～39歳	0	0
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	1	0

生産者番号2

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	0	0
60～69歳	1	1
50～59歳	0	0
40～49歳	0	0
30～39歳	1	1
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	2	2

生産者番号3

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	1	1
60～69歳	0	0
50～59歳	0	0
40～49歳	0	0
30～39歳	1	0
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	2	1

生産者番号8

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	0	0
60～69歳	1	1
50～59歳	0	0
40～49歳	0	0
30～39歳	0	0
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	1	1

生産者番号9

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	1	0
60～69歳	0	1
50～59歳	0	0
40～49歳	1	0
30～39歳	0	0
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	2	1

生産者番号10

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	1	0
60～69歳	0	0
50～59歳	0	0
40～49歳	1	0
30～39歳	0	0
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	2	0

生産者番号11、14

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	0	0
60～69歳	0	0
50～59歳	0	0
40～49歳	1	0
30～39歳	0	0
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	1	0

生産者番号12

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	0	0
60～69歳	2	0
50～59歳	1	0
40～49歳	0	0
30～39歳	0	0
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	3	0

生産者番号13

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	0	0
70～79歳	0	0
60～69歳	0	0
50～59歳	0	0
40～49歳	0	0
30～39歳	1	1
20～29歳	0	0
10～19歳	0	0
計	1	1

単位：人
聞き取り調査により作成。

第3表 栽培開始年

年	生産者数	年	生産者数
1988年	1	2004年	1
1989年	1	2005年	0
1990年	0	2006年	0
1991年	0	2007年	0
1992年	0	2008年	0
1993年	0	2009年	1
1994年	0	2010年	1
1995年	0	2011年	0
1996年	1	2012年	0
1997年	1	2013年	0
1998年	0	2014年	0
1999年	0	2015年	2
2000年	1	2016年	1
2001年	1	2017年	0
2002年	1	2018年	0
2003年	0	2019年	1
		計	14

単位：戸
聞き取り調査により作成。

第4表 栽培作物の組み合わせ型

栽培作物	生産者数
①啓翁桜+果樹	3
②啓翁桜+米+果樹	3
③啓翁桜+花き	2
④啓翁桜+特用林産物（シイタケ）	1
⑤啓翁桜+米+花き	1
⑥啓翁桜+米+その他の穀物（ソバ）	1
⑦啓翁桜+野菜+果樹	1
⑧啓翁桜+花き+果樹	1
⑨啓翁桜+花き+花木	1
計	14

単位：戸
聞き取り調査により作成。

+米+その他の穀物（ソバ）、⑦啓翁桜+野菜+果樹、⑧啓翁桜+花き+果樹、⑨啓翁桜+花き+花木は1戸ずつとなっている。啓翁桜のみの生産者はいなく、生産者は啓翁桜と他の農作物や林産物を組み合わせた経営を行っている。全体的には果樹を栽培している生産者は8戸と多く、米を栽培している生産者と花きを栽培している生産者は5戸ずつとなっている。果樹ではサクランボ、ラ・フランス、リンゴ、ブドウ、モモ、スモモの中から1～3つ、花きではスノーボール、リアトリス、キクの中から1つを栽培している。

出荷先の組み合わせ型（第5表）は、非公表の生産者番号3、4、13の3戸を除くと①JAさがえ西村山に100%出荷している生産者（9戸）と、②JAさがえ西村山への出荷と個人で販売する直売の両方を行っている生産者（2戸）の2つがある。前述②のJA山形おきたまへの出荷と直売の出荷量の割合は、生産者番号2、12ともにJAさがえ西村山への出荷量が約90%、直売が約10%というようにJAさがえ西

第5表 出荷先

生産者番号	出荷先
1	JAさがえ西村山が100%
2	JAさがえ西村山が約90%、直売が約10%
5	JAさがえ西村山が100%
6	JAさがえ西村山が100%
7	JAさがえ西村山が100%
8	JAさがえ西村山が100%
9	JAさがえ西村山が100%
10	JAさがえ西村山が100%
11	JAさがえ西村山が100%
12	JAさがえ西村山が約90%、直売が約10%
14	JAさがえ西村山が100%

生産者番号3、4、13は、N. A. のため省略した。
聞き取り調査により作成。

村山への出荷量の方が多い。このように、JA さがえ西村山の管轄地域では、出荷先の組み合わせ型は2つあるが、JA さがえ西村山には2つのタイプともにすべての生産者が出荷している。

例年の平均出荷量（第6表）は、非公表の生産者番号9、10、11、12、13、14の6戸を除く

第6表 例年の平均出荷量

出荷量	生産者数
約7,000本	1
約13,000本	1
約15,000本	1
約25,000本	2
約40,000本	2
約50,000本	1
計	8

単位：戸
生産者番号9、10、11、12、13、14の6戸は、N. A. のため省略した。
聞き取り調査により作成。

と約7,000本～約50,000本までであるが、この中で生産者数が一番多いのは約25,000本と約40,000本の2戸ずつである。JA さがえ西村山の管轄地域では約50,000本を出荷している生産者が1戸あるが、この生産者は山形県内で3番目に多い出荷量である。

出荷量が多い生産者は、作付面積も大きい傾向にある。表には示さないが、出荷量が約7,000本の生産者は作付面積が約0.4ha、同じく約13,000本や約15,000本や約25,000本の本生産者は作付面積が約1.0ha～約2.0ha、同じく約40,000本や約50,000本の本生産者は作付面積が約3.0ha～約4.0haとなっている。

9. 産地の抱える問題点

各生産者からみた当産地の抱える問題点は第7表に示した。便宜的に半数にあたる7戸以上の回答があった問題点は、①「生産者の高齢化が進んでいる」が12戸、②「天候不順による出荷量への影響が大きい」が12戸、③「後継者が不足している」が9戸、④「生産者によって品質にばらつきがある」が9戸、⑤「啓翁桜と他の農産物の栽培が重複する」が8戸、⑥「ウ

第7表 産地の抱える問題点

問題点	生産者番号														計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
生産者の高齢化が進んでいる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12戸
後継者が不足している	○		○	○			○	○			○	○	○	○	9戸
高齢者の労働の負担感が大きい				○			○	○	○		○		○		6戸
啓翁桜と他の農産物の栽培が重複する			○	○	○	○	○	○	○					○	8戸
天候不順による出荷量への影響が大きい	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	12戸
手入れや作業が難しい		○		○				○	○			○		○	6戸
ウソによる花芽被害の影響が大きい	○	○	○	○	○	○	○		○						8戸
肥料代や薬品代が高い									○						1戸
啓翁桜の収益率が悪い								○		○	○				3戸
生産者によって品質にばらつきがある	○	○			○	○	○	○	○		○		○		9戸
啓翁桜の需要喚起が必要である		○			○	○	○		○	○		○		○	8戸
啓翁桜の販路拡大が必要である	○	○		○	○	○	○		○					○	8戸
産地としてのまとまりが不足している	○				○	○			○	○	○			○	7戸

聞き取り調査により作成。

ソによる花芽被害の影響が大きい」が8戸、⑦「啓翁桜の需要喚起が必要である」が8戸、⑧「啓翁桜の販路拡大が必要である」が8戸、⑨「産地としてのまとまりが不足している」が7戸の9つであった。

一方、回答が半数以下となったのは、⑩「高齢者の労働の負担感が大きい」が6戸、⑪「手入れや作業が難しい」が6戸、⑫「啓翁桜の収益率が悪い」が3戸、⑬「肥料代や薬品代が高い」が1戸であった。

前述①の生産者の高齢化は、多くの生産者が問題視している。この問題はⅡ章8節の産地全体の生産者年齢構成でも指摘したが、生産者の高齢化は進んでいるものの、30歳代～50歳代の生産者は生産者合計26人中10人がいるため、後継者は着実に育成されている面もある。JA さがえ西村山の啓翁桜産地は、今後生産者のリタイアが続いた場合、縮小化は避けられないが、存続はできると考える。産地存続のためには将来を担う若年の後継者が必要であるため、今後はJA さがえ西村山花木部会、山形県村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課によって強化策を検討する必要があると考える。

各年の出荷量は、前述②の大雨、大雪、干ばつなどの天候不順の影響や前述⑥のウソという鳥に花芽を食べられる被害の影響などにより増減するが、啓翁桜は露地栽培であるため、この被害を完全に防ぐことは難しい問題でもある。

前述④の生産者による品質のばらつきを小さくするためには、生産者番号5は啓翁桜生産者の環状剥皮処理などの栽培技術を合わせる取り組みを強化する必要があるとの意見があった。また、生産者番号6は啓翁桜生産者の栽培技術を合わせる取り組みを継続および強化し、各生産者は丁寧に栽培することを心がける必要があることと、共同で利用する促成室が西川町以外の市町にも整備すれば生産者による品質のばらつきが小さくなるのではないかとの意見があった。

前述⑦の需要喚起については、生産者番号6と生産者番号12は消費者へ周知する取り組みが必要であるとの意見があった。

前述⑧の販路拡大については、生産者番号5は需要が見込める関東地方の市場にさらに多く出荷した方が良いとの意見や、生産者番号6は需要が見込める2月14日のバレンタインの時期に多く出荷することや東南アジアへも出荷すると良いのではないかとの意見があった。

Ⅲ. 啓翁桜産地の生産流通構造 ——JA 庄内みどり——

1. 栽培の始まり

JA 庄内みどりの管轄地域は酒田市袖浦以外の酒田市（以下、酒田市）と遊佐町である（第1図）⁵。啓翁桜の栽培は酒田市と遊佐町ともに行われている。酒田市と遊佐町では生産者がそれぞれに栽培を始めたため、先駆者などによる栽培の呼びかけはみられない。中でも最初に始めたのは、酒田市では庄内日報の記事（2013. 1. 19、2017. 1. 18）によると1973年にオクラとトマトの野菜生産者の高橋春樹氏（当時31歳）が、遊佐町では1993年に米生産者の菅原 敏氏（当時50歳）である。とくに、高橋春樹氏は酒田市を含む山形県内各地で行われている啓翁桜の栽培技術の土台づくりに貢献した人物の一人である。

2018年度の生産者数は22戸であるが、啓翁桜の栽培を始めるにあたり多くの生産者が理解していたことは、各生産者への聞き取り調査によると、①収入が安定して得られる作物であること、②転作田や砂丘地、果樹園跡地、緩傾斜地などでも樹園地にできること、③山形県内で栽培が始まった花木であること、④JA 庄内みどりの管轄地域において啓翁桜の栽培に詳しい生産者がいたこと、⑤啓翁桜の需要喚起のためのイベントを通して知名度が上がっていること、の5点である。

2. 生産者数の推移

生産者数は、2018年8月10日に行ったJA 庄内みどりへの聞き取り調査によると、集計していない年度もあるが、1973年度は1戸、1983年度は5戸、1988年度は7戸となっている。続いて、2011年度は17戸、2014年度は19戸、2015年

度は20戸、2017年度は22戸、2018年度は22戸である。2018年度は22戸であるが、うち酒田市は15戸となっている。

3. 樹園地と作付面積

酒田市では生石（おいし）、本楯（もとたて）、木川（きがわ）、浜中（はまなか）など、遊佐町では江地（えじ）や野沢（のぞわ）などにある樹園地で啓翁桜の栽培が行われている。このように、樹園地は酒田市、遊佐町ともに点在している。樹園地は、酒田市では主に標高約10m～約100mにある畑、転作田、耕作放棄地、杉林を利用している。また、遊佐町では主に標高約50m～約150mにある畑や転作田を利用している。

作付面積は、2018年8月10日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、集計していない年度もあるが、2011年度は約17ha、2014年度は約18ha、2015年度は約26ha、2017年度は約30ha、2018年度は約30haとなっている。なお、2010年度以前の作付面積はJA庄内みどりで集計していないため不明である。

JA庄内みどりの広報誌「みどりNo.274」（2017年2月号）、JA庄内みどりきらきらEyeランドの記事（2017.1.18）、やまがたアグリネットの記事（2017.2.2、2018.3.12）によると、JA庄内みどりと生産者グループ「波の会」では、2012年に国の耕作放棄地再生利用緊急対策事業を活用して酒田市浜中に約30aの啓翁桜の樹園地を整備した。この啓翁桜栽培は2012年に酒田市農業委員会が耕作放棄地の解消へ向けた取り組みの1つとしてJA庄内みどりに委託したことが始まりである。栽培は2014年から始まった。施肥や環状剥皮処理などの栽培技術は、山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農業技術普及課やJA庄内みどり花き部会花木専門部より指導を受けた。出荷は2017年2月16日から始まった。

JA庄内みどりの広報誌「みどりNo.274」（2017年2月号）、JA庄内みどりきらきらEyeランドの記事（2017.1.18）によると、生産者グループ「波の会」の2017年2月時点の会員は8人である。生産者グループ「波の会」では、毎年

10,000本以上を出荷していきたいと考えている。

4. 集出荷を行う作業室を併設した促成室の整備状況

JA庄内みどりでは、組合員が共同で利用する促成室を整備していない。そのため、促成室は各生産者が所有している（写真8、写真9）。促成室は自己資金で建設した生産者や、「山形県園芸大国やまがた産地育成支援事業」などを活用しながら自己資金と合わせて建設した生産者もいる。

各生産者は、自己管理の下、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷、集出荷場への商品の搬入までの作業を行う。



写真8 酒田市の生産者が所有する促成室
19.2.7撮影



写真9 酒田市の生産者が所有する促成室の内部
19.2.7撮影

選別の長さで等級は、長さが60cm、70cm、80cm、90cm、125cm、165cmの6つあり、等級はそれぞれの長さで秀と優の2つがある。

集出荷場は、酒田市の生産者が酒田市手蔵田にあるJA庄内みどり酒田流通園芸センター、遊佐町の生産者が遊佐町庄泉堅田にあるJA庄内みどり遊佐町園芸センターとなる⁶。JA庄内みどり酒田流通園芸センターとJA庄内みどり遊佐町園芸センターには、12月20日～3月下旬の火、木、日曜日の8:30～9:00までに搬入する。それぞれの集出荷場では、JA庄内みどりの担当者が長さ、等級、出荷量を確認して出荷する。集出荷場から市場へ出荷する時はJA全農山形ライフサポートの手配する運送業者が行う。

5. JAからの出荷先と出荷量の調整

出荷量は、2018年8月9日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、2009年度は約22万本、2010年度は約26万本、2011年度は約20万本であった。続いて、2012年度は約14万本、2013年度は約14万本、2014年度は約27万本であった。さらに、2015年度は約20万本、2016年度は約22万本、2017年度は約21万本となっている。なお、2008年度以前の出荷量はJA庄内みどりで集計していないため不明である。

出荷額は、2018年8月9日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、集計していない年度もあるが、1992年度は約1,014万円、2003年度は3,945万円、2009年度は約2,472万円、2010年度は約3,053万円であった。続いて、2011年度は約2,830万円、2012年度は約1,983万円、2013年度は約1,929万円、2014年度は約3,156万円であった。さらに、2015年度は約2,524万円、2016年度は約3,517万円、2017年度は約2,942万円となっている。

例年の出荷先は、2018年8月9日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、①東京都中央卸売市場大田市場には約35%、②株式会社オークネット・アグリビジネスには約35%、③東京都中央卸売市場世田谷市場には約10%、④その他の市場には合わせて約20%と

なっている。また、12月の出荷量は全出荷量の約10%、同じく1月と2月は約25%ずつ、3月は約40%となっている。1～3月の出荷量は全出荷量の約90%を占める。

JA庄内みどりや山形県、酒田市、遊佐町などで構成されている酒田地区農産物輸出推進協議会では、2011年度より販路拡大のため香港などの海外の生花市場への出荷を始めた（庄内日報2015.2.12、河北新報2017.2.4、山形新聞2017.2.23）。香港には、2011年度より各家庭で豪華な生花を飾って祝う習慣がある旧正月（2月19日）に合わせて毎年出荷している。ベトナムには2017年度より適宜出荷している。ロシアには、男性が女性に花を贈る習慣がある「国際女性デー」（3月8日）に合わせて2013年度より適宜出荷している。2014年度まではハバロフスクにある生花市場との取引を行ってきたが、2017年度はハバロフスクよりも人口が多いサンクトペテルブルクにある生花市場との取引に変更した。

香港などの海外への輸出は、2018年3月16日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、株式会社オークネット・アグリビジネスに委託している。輸送手段は、酒田市手蔵田にあるJA庄内みどり酒田流通園芸センターよりトラックで成田国際空港へ輸送し、成田国際空港からは取引先の生花市場に近い空港へ空輸する。

香港への出荷量は、庄内日報の記事（2015.2.12）と2018年8月9日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、2011年度が約2,800本、2012年度が約3,400本、2013年度が約5,700本、2014年度が約6,000本、2015年度が約5,100本、2016年度が約7,200本、2017年度が約9,000本となっている。また出荷額は、庄内日報の記事（2015.2.12）と2018年8月9日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、2011年度が約84万円、2012年度が約102万円、2013年度が約171万円、2014年度が約180万円、2015年度が約161万円、2016年度が約220万円、2017年度が約274万円となっている。一方、ロシアへの出荷量は2018年8月9日に行ったJA庄内みどりへの聞き取り調査によると、2017年度が約

170本となっている。また、その出荷額は約44,000円となっている。

6. 栽培技術の支援

生産者への栽培技術の支援は、2018年8月9日に行ったJA 庄内みどりへの聞き取り調査とJA 庄内みどりきらきらEyeランドの記事(2017.12.18、2018.2.28)によると、JA 庄内みどり花き部会花木専門部と山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農業技術普及課との共同で行っている。JA 庄内みどり花き部会花木専門部は、1997年4月に生産者の共同事業と共同出荷体制を築くことを目的に結成された。2017年度の部会員は15戸となっている。

JA 庄内みどり花き部会花木専門部と山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農業技術普及課では、5月下旬に前年度産出荷反省会と今年度産栽培講習会、11月下旬に樹園地で枝切りする時のポイントを確認するための年末出荷者出荷会議、1月下旬にJA 庄内みどり酒田流通園芸センターで出荷規格や枝の選び方を確認するための出荷会議と出荷目揃い会を実施している。

また、やまがたアグリネットの記事(2017.1.4)によると、積算温度はアメダスの気温データを用いて確認するが、樹園地の場所によっては積算温度が異なるため、山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農業技術普及課では、主な樹園地に温度記録計を設置して積算温度がわかるようにしている。その積算温度は生産者に提供している。

庄内日報の記事(2013.1.19)とJA 庄内みどりの広報誌「みどり」(2018年春号)によると、酒田市とJA 庄内みどり花き部会花木専門部では、啓翁桜の直売や栽培地の様子の紹介、きれいな花の咲かせ方についてのアドバイスなどを行うイベントを開催している。例えば、2013年からは毎年2月下旬～3月上旬に東京都渋谷区にある東急百貨店東横店で「JA 庄内みどり花き部会啓翁桜品評会」を、2017年からは毎年2月下旬に東京都目黒区の小売店で「JA 庄内みどり啓翁桜フェア」を行っている。

7. 組合の結成と活動状況

JA 庄内みどりの管轄地域では、生産者からなる組合は結成されていない。そのため、栽培技術に関する講習会などの活動はⅢ章6節に記述したJA 庄内みどり花き部会花木専門部と山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農業技術普及課との共同で行っている。

8. 生産者の状況

産地全体の生産者年齢構成(第8表)は、生産者合計は27(男24、女3)人で、その生産者は20歳代～80歳代までいるが、とくに50～59歳は10(男8、女2)人と60～69歳は男10人と多い。続いて、40～49歳は男女1人ずつ、70～79歳は男2人、20～29歳と30～39歳と80～89歳は男1人ずつとなっている。

産地全体の生産者平均年齢は、この表には示していないが58.3(男59.0歳、女52.7)歳とやや高い。JA 庄内みどりでは、生産者の高齢化は進んでいるものの、30歳代～50歳代の生産者は生産者合計27人中10人がいるため、後継者は着実に育成されている。

1戸ごとの生産者年齢構成(第9表)は、①生産者番号1は50～59歳に男1人、②生産者番号2は50～59歳に男1人、40～49歳に女1人、

第8表 産地全体の生産者年齢構成

	男	女
90歳以上	0	0
80～89歳	1	0
70～79歳	2	0
60～69歳	10	0
50～59歳	8	2
40～49歳	1	1
30～39歳	1	0
20～29歳	1	0
10～19歳	0	0
計	24	3

単位：人
聞き取り調査により作成。

第9表 1戸ごとの生産者年齢構成

生産者番号1			生産者番号2			生産者番号3			生産者番号4		
	男	女		男	女		男	女		男	女
90歳以上	0	0									
80～89歳	0	0									
70～79歳	0	0	70～79歳	0	0	70～79歳	1	0	70～79歳	1	0
60～69歳	0	0	60～69歳	0	0	60～69歳	0	0	60～69歳	2	0
50～59歳	1	0	50～59歳	1	0	50～59歳	1	0	50～59歳	3	0
40～49歳	0	0	40～49歳	0	1	40～49歳	0	0	40～49歳	0	0
30～39歳	0	0									
20～29歳	0	0									
10～19歳	0	0									
計	1	0	計	1	1	計	2	0	計	6	0

生産者番号5			生産者番号6			生産者番号7			生産者番号8		
	男	女		男	女		男	女		男	女
90歳以上	0	0									
80～89歳	0	0	80～89歳	0	0	80～89歳	1	0	80～89歳	0	0
70～79歳	0	0									
60～69歳	1	0	60～69歳	1	0	60～69歳	0	0	60～69歳	1	0
50～59歳	0	1	50～59歳	0	0	50～59歳	0	1	50～59歳	0	0
40～49歳	0	0									
30～39歳	0	0	30～39歳	1	0	30～39歳	0	0	30～39歳	0	0
20～29歳	0	0	20～29歳	0	0	20～29歳	1	0	20～29歳	0	0
10～19歳	0	0									
計	1	1	計	2	0	計	2	1	計	1	0

生産者番号9			生産者番号10		
	男	女		男	女
90歳以上	0	0	90歳以上	0	0
80～89歳	0	0	80～89歳	0	0
70～79歳	0	0	70～79歳	0	0
60～69歳	5	0	60～69歳	0	0
50～59歳	2	0	50～59歳	0	0
40～49歳	0	0	40～49歳	1	0
30～39歳	0	0	30～39歳	0	0
20～29歳	0	0	20～29歳	0	0
10～19歳	0	0	10～19歳	0	0
計	7	0	計	1	0

単位：人
聞き取り調査により作成。

③生産者番号3は70～79歳と50～59歳に男1人ずつとなっている。続いて、④生産者番号4は70～79歳に男1人、60～69歳に男2人、50～59歳に男3人、⑤生産者番号5は60～69歳に男1人、50～59歳に女1人、⑥生産者番号6は60～69歳と30～39歳に男1人となっている。さらに、⑦生産者番号7は80～89歳に男1人、50～59歳に女1人、20～29歳に男1人、⑧生産者番号8は60～69歳に男1人、⑨生産者番号9は60～69歳に男5人、50～59歳に2人、⑩生産者番号10は40～49歳に1人となっている。このように、1戸あたりの生産者数は1～7人であるため、啓翁桜の栽培はいずれも少人数で成り立っている。1人は3戸、2人は4戸、3人は1戸、6人は1戸、7人は1戸となっている。2～3人の場合は夫婦と親子、6～7人の場合は農事組合法人による従業員の雇用や生産者グループの会員によるものである。また、後継者がいる（親から継いだわけではないが、自ら始めた生産者を含む）のは、生産者番号3、6、7、10の4戸である。

栽培開始年（第10表）は、1973年以降、0戸の年もあるが、2012年と2017年は2戸ずつであった。1973年、1981年、1993年、1996年、2006年、2014年は1戸ずつであった。酒田市では1973年、遊佐町では1993年に啓翁桜の栽培が始まったが、現在はその子が後継者として栽培を行っている。

栽培作物の組み合わせ型（第11表）は、①啓翁桜＋花きは4戸、②啓翁桜のみは1戸、③啓翁桜＋野菜は1戸、④啓翁桜＋果樹＋花きは1戸、⑤啓翁桜＋野菜＋花きは1戸、⑥啓翁桜＋米＋その他の穀物（大豆）＋野菜は1戸、⑦啓翁桜＋米＋果樹＋野菜は1戸となっている。10戸中9戸は啓翁桜と他の農作物を組み合わせた経営を行っている。全体的には花きを栽培している生産者は6戸と多く、野菜を栽培している生産者は4戸、果樹を栽培している生産者は2戸と続いている。花きではユリ、スノーボール、ナナカマド、アルストロメリア、ストック、トルコギキョウの中から1～2つ、野菜ではパプリカ、フキノトウ、ハウレンソウ、コマツナの

第10表 栽培開始年

年	生産者数	年	生産者数
1973年	1	1997年	0
1974年	0	1998年	0
1975年	0	1999年	0
1976年	0	2000年	0
1977年	0	2001年	0
1978年	0	2002年	0
1979年	0	2003年	0
1980年	0	2004年	0
1981年	1	2005年	0
1982年	0	2006年	1
1983年	0	2007年	0
1984年	0	2008年	0
1985年	0	2009年	0
1986年	0	2010年	0
1987年	0	2011年	0
1988年	0	2012年	2
1989年	0	2013年	0
1990年	0	2014年	1
1991年	0	2015年	0
1992年	0	2016年	0
1993年	1	2017年	2
1994年	0	2018年	0
1995年	0	2019年	0
1996年	1	計	10

単位：戸
聞き取り調査により作成。

第11表 栽培作物の組み合わせ型

栽培作物	生産者数
①啓翁桜＋花き	4
②啓翁桜のみ	1
③啓翁桜＋野菜	1
④啓翁桜＋果樹＋花き	1
⑤啓翁桜＋野菜＋花き	1
⑥啓翁桜＋米＋その他の穀物（大豆）＋野菜	1
⑦啓翁桜＋米＋果樹＋野菜	1
計	10

単位：戸
聞き取り調査により作成。

中から1～2つ、果樹ではカキ、メロンの中から1つを栽培している。

出荷先の組み合わせ型（第12表）は、非公表の生産者番号7の1戸を除くと①JA庄内みどりに100%出荷している生産者（4戸）、②JA庄内みどりへの出荷と個人で販売する直売の両方を行っている生産者（4戸）、③個人で販売する直売に100%出荷している生産者（1戸）の3つがある。前述②のJA庄内みどりへの出荷と直売の出荷量の割合は、生産者番号2はJA庄内みどりへの出荷量が約95%、直売が約5%、生産者番号3はJA庄内みどりへの出荷量が約90%、直売が約10%となっている。また、生産者番号5はJA庄内みどりへの出荷量が約99.5%、直売が約0.5% 生産者番号6はJA庄内みどりへの出荷量が約60%、直売が約40%となっている。このように、出荷先の組み合わせ型は3つあるが、JA庄内みどりには前述③の1戸を除き、前述①と②の8戸の生産者が出荷している。

例年の平均出荷量（第13表）は、非公表の生産者番号6、7、8、9、10の5戸を除くと約10,000本～約70,000本までであるが、生産者数は約10,000本、約15,000本、約20,000本、約50,000本、約70,000本が1戸ずつと分散している。約70,000本を出荷している生産者は1戸あるが、この生産者は山形県内で2番目に多い出荷量である。

出荷量が多い生産者は、作付面積も大きい傾向にある。表には示さないが、出荷量が約15,000本の生産者は作付面積が約1.0ha、同じく約20,000本の生産者は約3.0ha、同じく約50,000本や約70,000本の生産者は約4.1ha～約4.5haとなっている。

9. 産地の抱える問題点

各生産者からみた当産地の抱える問題点は第14表に示した。非公表の生産者番号7の1戸を除くと回答の多い順では、①「生産者によって品質にばらつきがある」が8戸、②「天候不順による出荷量への影響が大きい」が5戸、③「啓翁桜の需要喚起が必要である」が5戸、④

第12表 出荷先

生産者番号	出荷先
1	JA庄内みどりが100%
2	JA庄内みどりが約95%、直売が約5%
3	JA庄内みどりが約90%、直売が約10%
4	JA庄内みどりが100%
5	JA庄内みどりが約99.5%、直売が約0.5%
6	JA庄内みどりが約60%、直売が約40%
8	直売が100%
9	JA庄内みどりが100%
10	JA庄内みどりが100%

生産者番号7はN. A. のため省略した。
聞き取り調査により作成。

第13表 例年の平均出荷量

出荷量	生産者数
約10,000本	1
約15,000本	1
約20,000本	1
約50,000本	1
約70,000本	1
計	5

単位：戸
生産者番号6、7、8、9、10の5戸は、N. A. のため省略した。
聞き取り調査により作成。

「ウソによる花芽被害の影響が大きい」が4戸、⑤「後継者が不足している」が3戸、⑥「高齢者の労働の負担感が大きい」が3戸、⑦「手入れや作業が難しい」が3戸、⑧「啓翁桜の販路拡大が必要である」が3戸、⑨「産地としてのまとまりが不足している」が3戸、⑩「生産者の高齢化が進んでいる」が2戸、⑪「啓翁桜と他の農産物の栽培が重複する」が1戸、⑫「啓翁桜の収益率が悪い」が1戸であった。また、⑬「肥料代や薬品代が高い」は0戸であった。多くの生産者は、前述①の品質のばらつき、前述②の天候不順による出荷量の影響、前述③の

第14表 産地の抱える問題点

問題点	生産者番号										計
	1	2	3	4	5	6	8	9	10		
生産者の高齢化が進んでいる			○							○	2戸
後継者が不足している	○				○			○			3戸
高齢者の労働の負担感が大きい	○						○		○		3戸
啓翁桜と他の農産物の栽培が重複する					○						1戸
天候不順による出荷量への影響が大きい		○	○	○	○		○				5戸
手入れや作業が難しい	○			○				○			3戸
ウソによる花芽被害の影響が大きい	○	○	○		○						4戸
肥料代や薬品代が高い											0戸
啓翁桜の収益率が悪い					○						1戸
生産者によって品質にばらつきがある	○	○	○	○	○	○	○	○			8戸
啓翁桜の需要喚起が必要である		○	○	○	○			○			5戸
啓翁桜の販路拡大が必要である		○		○				○			3戸
産地としてのまとまりが不足している			○			○			○		3戸

生産者番号7はN. A. のため省略した。
聞き取り調査により作成。

需要喚起を問題視している。一方、前述⑩の生産者の高齢化や前述⑤の後継者の不足については回答が比較的少なかった。

前述①の生産者による品質のばらつきを小さくするためには、生産者番号1は啓翁桜生産者の病害虫防除の栽培技術を合わせると良いとの意見や、生産者番号4は啓翁桜生産者の努力が必要であるとの意見があった。また、生産者番号6は啓翁桜生産者の環状剥皮処理の栽培技術を合わせる必要があることと、啓翁桜生産者が共同で利用するJA 庄内みどりの促成室があれば良いのではないかと意見があった。

さらに、生産者番号2は啓翁桜生産者に品質改善を促すことが必要であるとの意見があった。JA 庄内みどりの広報誌「みどり No.239」（2014年3月号）によると、生産者番号2は経験年数の異なる生産者が同じ規格で出荷するためには、栽培技術に関する講習会の実施が不可欠であると述べている。

各年の出荷量は、前述②の台風、大雨、塩害、霜害、干ばつなどの天候不順の影響や前述④のウソという鳥に花芽を食べられる被害の影響な

どにより増減するが、啓翁桜は露地栽培であるため、この被害を完全に防ぐことは難しい問題でもある。

前述③の需要喚起については、生産者番号3はテレビで宣伝するのが良いとの意見や、生産者番号5は啓翁桜の知名度を高める取り組みを検討する必要があるとの意見があった。

IV. おわりに

本研究は、山形県における啓翁桜産地の生産流通構造について明らかにすることが目的であるが、本稿ではその第一段階として酒井・浜西（2019、2020）に続き、JA さがえ西村山とJA 庄内みどりを例に取り上げて文献や資料、インターネットでの検索、生産者からの紹介、住宅地図、各JA や各生産者への聞き取り調査で得られた内容により検討を行った。

JA さがえ西村山における啓翁桜の栽培は、朝日町が1988年、大江町が2000年に始まった。西川町と寒河江市では聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。啓翁桜の栽培は

生産者がそれぞれに始めたため、先駆者などによる栽培の呼びかけはみられない。

2018年度の実産者数は29戸である。西川町の主要な樹園地は尾畑山の吉川営農団地にまとまっているが、朝日町では宮宿や和合など、大江町では富沢、三郷乙、本郷などに点在している。西川町では標高約280m付近にある吉川営農団地と標高約140m～約200mにある畑や耕作放棄地などを利用している。また、朝日町では主に標高約200m～350mにある畑や耕作放棄地、大江町では主に標高約120m～約150mにある畑、転作田、耕作放棄地、借地を利用している。寒河江市については聞き取り調査の中で明らかにすることができなかった。総作付面積は不明であるが、西川町の作付面積は2016年度が約19.3ha、同じく2021年度が約34.1haとなっている。

集出荷を行う作業室を併設した促成室は、西川町では啓翁桜促成室を整備している。この促成室はJA さがえ西村山の管轄地域の生産者であれば誰でも利用することができるが、寒河江市と朝日町の実産者は自ら促成室を所有しているため、この啓翁桜促成室は、現時点では西川町と大江町の生産者が利用している。西川町の啓翁桜促成室では、切り枝（粗枝）の調整と結束、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷、集出荷場への商品の搬入までの作業を行っている。この啓翁桜促成室での作業は、西川町6戸と大江町3戸の計9戸の実産者からなる「西川町啓翁桜生産組合」が行っている。

一方、寒河江市と朝日町の各生産者は、自己管理の下、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷、集出荷場への商品の搬入までの作業を行う。JA さがえ西村山における選別の長さと同級は、長さが80cm、100cm、120cm、150cmの4つあり、同級はそれぞれの長さによって秀、優、良の3つがある。集出荷場はJA さがえ西村山フラワーセンターとなる。集出荷場には定められた曜日と時間帯に搬入する。

JA さがえ西村山の主要な市場は、東京、大

阪、仙台の大都市やJA 全農山形のギフトである。2018年度の実荷量は約27万本、同じく実荷量は約3,746万円となっている。

生産者への栽培技術の支援は、JA さがえ西村山花木部会と山形県村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課との共同で行っている。4月下旬には啓翁桜栽培研修会、9月上旬と10月下旬には樹園地巡回を実施している。

生産者合計は26（男20、女6）人で、その生産者は30歳代～70歳代までいるが、とくに60～69歳は12（男9、女3）人と多い。産地全体の生産者平均年齢は55.8（男56.2、女54.7）歳である。JA さがえ西村山では、生産者の高齢化は進んでいるものの、30歳代～50歳代の生産者は合わせて10人がいるため、後継者は着実に育成されている。1戸あたりの生産者数は1～4人であり、2～4人の場合は夫婦や親子が多い他、農事組合法人による従業員の雇用もある。また、後継者がいる、もしくは親がリタイアし、子のみで栽培を行っているのは7戸である。

栽培開始年は、1988年以降、0戸の年もあるが、2015年は2戸、1988年、1989年、1996年、1997年、2000年、2001年、2002年、2004年、2009年、2010年、2016年、2019年は1戸ずつであった。

生産者は啓翁桜と他の農作物や林産物を組み合わせた経営を行っている。全体的には果樹を栽培している生産者は8戸と多く、米を栽培している生産者と花きを栽培している生産者は5戸ずつである。果樹ではサクランボ、ラ・フランス、リンゴ、ブドウ、モモ、スモモの中から1～3つ、花きではスノーボール、リアトリス、キクの中から1つを栽培している。

出荷先は、①JA さがえ西村山に100%出荷している生産者（9戸）と、②JA さがえ西村山への出荷と個人で販売する直売の両方を行っている生産者（2戸）の2つがある。JA さがえ西村山の管轄地域では、出荷先の組み合わせ型は2つあるが、JA さがえ西村山には2つのタイプともにすべての生産者が出荷している。例年の平均実荷量は約7,000本～約50,000本までであるが、この中で生産者数が一番多いのは約

25,000本と約40,000本の2戸ずつである。約50,000本を出荷している生産者は1戸あるが、この生産者は山形県内で3番目に多い出荷量となっている。また、出荷量が多い生産者は作付面積も大きい傾向にある。例えば、出荷量が約7,000本の生産者は作付面積が約0.4ha、同じく約13,000本や約15,000本や約25,000本の本生産者は作付面積が約1.0ha～約2.0ha、同じく約40,000本や約50,000本の本生産者は作付面積が約3.0ha～約4.0haとなっている。

各生産者からみたJA さがえ西村山の啓翁桜産地の抱える主な問題点は、生産者の高齢化と後継者の不足、天候不順やウソという鳥に花芽を食べられることによる出荷量の減少、生産者による品質のばらつき、啓翁桜の需要喚起と販路拡大、啓翁桜と他の農産物の栽培が重複すること、産地としてのまとまりが不足していることである。

一方、JA 庄内みどりにおける啓翁桜の栽培は、管轄地域である酒田市では1973年、遊佐町では1993年に始まった。生産者はそれぞれに栽培を始めたため、先駆者などによる栽培の呼びかけはみられない。2018年度の本生産者数は22戸である。樹園地は、酒田市では生石、本楯、木川、浜中など、遊佐町では江地や野沢などに点在している。樹園地は、酒田市では主に標高約10m～約100mにある畑、転作田、耕作放棄地、杉林を利用している。また、遊佐町では主に標高約50m～約150mにある畑や転作田を利用している。2018年度の作付面積は約30haである。

集出荷を行う作業室を併設した促成室は、各生産者が所有している。そのため、各生産者は自己管理の下、休眠打破処理、促成室での促成管理、選別と箱詰めを含む出荷、集出荷場への商品の搬入までの作業を行う。選別の長さと同級は、長さが60cm、70cm、80cm、90cm、125cm、165cmの6つあり、等級はそれぞれの長さに秀と優の2つがある。集出荷場は、酒田市の生産者が酒田市手蔵田にあるJA 庄内みどり酒田流通園芸センター、遊佐町の生産者が遊佐町庄泉堅田にあるJA 庄内みどり遊佐町園芸センターとなる。集出荷場には定められた曜日

と時間帯に搬入する。

JA 庄内みどりの主要な市場は、東京と、香港、ベトナム、ロシアの各都市の生花市場との取引を行う株式会社オークネット・アグリビジネスである。2017年度の出荷量は約21万本、同じく出荷額は約2,942万円となっている。

生産者への栽培技術の支援は、JA 庄内みどり花き部会花木専門部と山形県庄内総合支庁産業経済部酒田農業技術普及課との共同で行っている。5月下旬には前年度産出荷反省会と今年度産栽培講習会、11月下旬には年末出荷者出荷会議、1月下旬には出荷会議と出荷目揃い会を実施している。

生産者合計は27(男24、女3)人で、その生産者は20歳代～80歳代までいるが、とくに50～59歳は10(男8、女2)人と60～69歳は男10人と多い。産地全体の生産者平均年齢は58.3(男59.0歳、女52.7)歳とやや高い。JA 庄内みどりでは、JA 庄内みどりでは、生産者の高齢化は進んでいるものの、30歳代～50歳代の生産者は生産者合計27人中10人がいるため、後継者は着実に育成されている。1戸あたりの生産者数は1～7人であり、2～3人の場合は夫婦と親子、6～7人の場合は農事組合法人による従業員の雇用や生産者グループの会員によるものである。また、後継者がいる(親から継いだわけではないが、自ら始めた生産者を含む)のは4戸である。

栽培開始年は、1973年以降、0戸の年もあるが、2012年と2017年は2戸ずつであった。1973年、1981年、1993年、1996年、2006年、2014年は1戸ずつであった。

10戸中9戸は啓翁桜と他の農作物を組み合わせた経営を行っている。啓翁桜の栽培のみを行っている生産者は1戸である。全体的には花きを栽培している生産者は6戸と多く、野菜を栽培している生産者は4戸、果樹を栽培している生産者は2戸と続いている。花きではユリ、スノーボール、ナナカマド、アルストロメリア、ストック、トルコギキョウの中から1～2つ、野菜ではパプリカ、フキノトウ、ホウレンソウ、コマツナの中から1～2つ、果樹ではカキ、メ

ロンの中から1つを栽培している。

出荷先は、①JA庄内みどりに100%出荷している生産者（4戸）、②JA庄内みどりへの出荷と個人で販売する直売の両方を行っている生産者（4戸）、③個人で販売する直売に100%出荷している生産者（1戸）の3つがある。JA庄内みどりには前述③の1戸を除き、前述①と②の8戸の生産者が出荷している。例年の平均出荷量は約10,000本～約70,000本までであるが、生産者数は約10,000本、約15,000本、約20,000本、約50,000本、約70,000が1戸ずつと分散している。約70,000本を出荷している生産者は1戸あるが、この生産者は山形県内で2番目に多い出荷量である。また、出荷量が多い生産者は、作付面積も大きい傾向にある。出荷量が約15,000本の生産者は作付面積が約1.0ha、同じく約20,000本の生産者は約3.0ha、同じく約50,000本や約70,000本の生産者は約4.1ha～約4.5haとなっている。

各生産者からみたJA庄内みどりの啓翁桜産地の抱える問題点の上位3項目は、生産者による品質のばらつき、天候不順による出荷量の減少、啓翁桜の需要喚起である。

今後の研究課題は、本稿に続き、啓翁桜の生産者数が2戸以上であるJAみちのく村山の生産流通構造について検討し報告することである。また、山形県では毎年1月下旬に啓翁桜品評会を開催しているが、その意義やこれまでの受賞者と受賞者が多いJAについても検討していきたい。

謝辞

本研究の作成にあたっては、お忙しい中、聞き取り調査に協力していただいたJAさがえ西村山とJA庄内みどりの各生産者の皆様、JAさがえ西村山とJA庄内みどりの啓翁桜担当者の皆様に大変お世話になりました。ここに記して心より感謝申し上げます。

参考文献・資料

- ・河北新報（2017.2.4）：「啓翁桜 厳冬期の花 ロシアで咲き誇れ」。
- ・河北新報（2021.12.6）：厳冬に咲く「啓翁桜」特産化へ 山形・西川町、生産団地を整備。
- ・酒井宣昭・浜西駿輔（2019）：山形県における啓翁桜産地の生産流通構造—JAやまがたとJAさくらんぼひがしねの例—。東北学院大学東北文化研究所紀要51、17-37。
- ・酒井宣昭・浜西駿輔（2020）：山形県における啓翁桜産地の生産流通構造—JA山形おきたまとJAてんどうの例—。東北学院大学東北文化研究所紀要52、19-38。
- ・JA庄内みどり（2014年3月号）：「地域とJAを結ぶ広報誌・みどり No.239」、2-3。
- ・JA庄内みどり（2017年2月号）：「地域とJAを結ぶ広報誌・みどり No.274」、4。
- ・JA庄内みどり（2018年春号）：「地域とともに明日の農業を創造 みどり」、1。
- ・JA庄内みどり きらきらEyeランド（2017.1.18）：「耕作放棄地をサクラでいっぱい 「啓翁桜」待ち望み初出荷へ」。
- ・JA庄内みどり きらきらEyeランド（2017.12.18）：「啓翁桜の出荷調整講習会開催 花き部会花木専門部」。
- ・JA庄内みどり きらきらEyeランド（2018.2.28）：「春の息吹を届ける「啓翁桜」 目ざろえ会で出荷ポイント確認」。
- ・荘内日報（2013.1.19）：「淡いピンクかれんに」。
- ・荘内日報（2015.2.12）：「啓翁桜 香港の旧正月向けに出荷 色鮮やかで花芽多く 高品質に出荷量増加」。
- ・荘内日報（2017.1.18）：「早春告げる「啓翁桜」 高橋さんのハウスで出荷盛期」。
- ・やまがたアグリネット（2010.4.30）：「西川町「啓翁桜」栽培始まる」。
- ・やまがたアグリネット（2010.11.1）：「遊休園地に「金のなる木」を！～中山間地で啓翁桜に取り組む担い手集団～」。
- ・やまがたアグリネット（2011.4.25）：「さがえ西村山花木研修会の開催」。

- ・やまがたアグリネット (2015. 12. 28) : 「園芸特産づくり 西川町の啓翁桜いざ出発！」.
- ・やまがたアグリネット (2016. 12. 28) : 「「啓翁桜」の出荷始まる」.
- ・やまがたアグリネット (2017. 1. 4) : 「ひと足早い春を届ける「啓翁桜」の出荷がスタート！」.
- ・やまがたアグリネット (2017. 2. 2) : 「耕作放棄地再生利用実証圃で「啓翁桜」を初収穫！」.
- ・やまがたアグリネット (2018. 3. 12) : 「「啓翁桜」新規生産者の出荷がスタート」.
- ・山形新聞 (2017. 2. 23) : 「啓翁桜の輸出強化、ロシアへ昨年の2倍超 酒田地区農産物推進協」.
- ・山形県村山総合支庁産業経済部西村山農業技術普及課の資料 (2016. 11. 30) : 「初春を彩る「啓翁桜」の促成開始及び出発式の開催について」.

▼6 JA 庄内みどり酒田流通園芸センターの所在地は酒田市手蔵田字仁田47-7である。また、JA 庄内みどり遊佐町園芸センターの所在地は遊佐町庄泉堅田20-2である。

注

- ▼1 JA さがえ西村山では2017年11月30日、JA 庄内みどりでは2018年2月16日にそれぞれ確認を行った。インターネットでの検索でヒットした生産者もしくは各JAの啓翁桜の担当者には、①JAの管轄地域に啓翁桜の生産者がいるかどうか、②生産者数が2戸以上であるかどうかについて聞き取り調査を行った。なお、他のJAでの確認日は酒井・浜西(2019、2020)に記述したため、ここでは省略する。
- ▼2 尾畑山は西川町の南部、大江町との境界付近に位置している。
- ▼3 2017年11月23日に行った啓翁桜促成室での建設年や事業名などを記載したパネルの確認によると、JA さがえ西村山吉川ライスセンターの敷地面積は4,487㎡(約1,357坪)である。また、JA さがえ西村山吉川ライスセンターと啓翁桜促成室の所在地は、西川町吉川408である。
- ▼4 JA さがえ西村山フラワーセンターの所在地は、寒河江市高松248である。
- ▼5 JA 庄内みどりの管轄地域は、酒田市袖浦以外の酒田市と遊佐町である。酒田市袖浦はJA そでうらの管轄地域となる。2018年3月16日に行ったJA そでうらへの聞き取り調査によると、JA そでうらには啓翁桜の生産者がいないとのことであった。そのため、本稿ではJA 庄内みどりの管轄地域である「酒田市袖浦以外の酒田市」を「酒田市」のみに省略して表記する。